

書 評

桐生織物史編纂會編

『桐生織物史』の完成

上卷（昭和十年三月）中卷（十三年十二月）下卷（十五年六月）。通卷本文一六六九頁（菊版）

賀井善智

織物業がわが國民經濟の生成と發展の中に占めた特異な重要性のために、この問題はいままでも既にさまざまな角度から論究され、最近でもマヌファクチュアと問屋制度の論争或は所謂中小工業問題の検討の形で新たに顧みられてきたところだ。それなのに、この方面の資料に關しては、從來遺憾ながら案外な程に不充分だったといつてよい。何よりも日本の織物生産がいまだに在來の地域的な制約を脱却せず、しかも全國至るところに分散する各「機業地」の中で營まれてきたといふことが、

その大きな原因だったやうだ。そして確實な資料の不足が無用な論争をよび起した例も、實は決して稀なことではなかつた。

ちかごろ各機業地の同業組合や工業組合その他によつてそれぞれの沿革史が公刊されるの氣運に立到つたことは、だから、吾吾としてまことに有難いことといはねばならぬ。いま、最近數年の間に刊行されたもののみを思ひつくまゝに拾つてみても、「米澤織物同業組合史」「福井縣織物同業組合五十年史」「伊勢崎織物同業組合史」「秩父織物工業組合史」「八王子織物史」「西陣史」「尾西織物史」「小千谷綿縮史」「伊豫織物の沿革」「大阪木綿業誌」「大阪織物同業組合三十年誌」等を始め、まことに枚舉にいとまがない位だ。すべてが資料的に極めて價値高いものだといふ事も、吾々にとつて嬉しいことである。

こゝに紹介しようとする「桐生織物史」もさうしたものの一つなのだが、昭和三年春桐生織物同業組合内に織物史編纂會が設けられてより十二年餘、その間二回に互る展覽會と綿密な採訪により得られた豊富な資料と考證を盛つて完成した本史は、その尅大さと精度において、まさに類書中の白眉たるを失はな

い、まことに同地關係者の協力と編纂當事者たる八木昌平・前原寛三兩氏のたゆまざる努力は、全編至るところに貴重な新資料の提示と適宜な考證となつてあらはれてゐるのであつて、わが經濟史界がこの價値高い共同財を與へられたことに對し、まづ以上の諸氏に感謝せねばならない。

順序としてまづ本史の構成をのべれば、上巻には桐生織物の起源より天保に至るまで（起源、鎌倉時代より元文に至る「發達」、元文に至る「躍進」の四時期に分けて記述されてゐる）、中巻には天保より日清戰役に至る時期（天保より日清戰役に至る「更新」の兩時代に分けられる）、そして最後に二大戰役と屢次の恐慌に堪えて「克く近代の桐生織物工業形態を完成したる大成時代」として前大戰前（大正三年）までが下巻に收められてゐる。大戰以後の活躍時代の記録が割愛されたことは残念だが、この部分も既に前記八木氏により編纂されつゝあるときいてゐる。吾々はその早き完成を祈つてやまない。

二

さて、こゝで以上のすべてに互つて紹介することは未熟な筆者の任でもなく、また紙面の許す限りでもないので、通讀によつて得られた筆者の感想の一端をメモ風に敘して、いさゝか紹介の筆にかへたいとおもふ。

書 評

元來桐生地方は耕地狭く古くより農家の餘業として蠶織のことが營まれてゐたのであり、室町末期すでに商品化がみられ（天正一九・一、節市開設）、また慶長の御旗絹獻納から推計すれば當時すでに領内五十四村二四一〇の機臺が算せられたやうだが、それが一般に商品化の進展を示したのは正保三年（六四）の旗絹代永納化による商品化の促進（桐生絹市）を契機としたと考へてよいやうだ。この絹市は大間々絹市の開設により一時壓倒されるが、しかし後者を通じての商品化は、特に貞享元祿の繁榮を縫つて、絹賣による江戸西京との直接取引が行はれるまでに躍進し、これらを通じて享保年間には機屋の專業化すら或程度進歩した模様だ。享保十六年（二七三）の大間々よりの桐生絹市の成功的な再興はこの間の事情を最も端的に要約したもので、更にこれと前後して京都白張法や紅染法が移入されるに至つてゐた事情からみても、當時の桐生機業の自成的成熟の度合がどんなものだったかを知ることが出来る。元文三年（八七三）の西陣高機の移入は、まさにかうした地盤の上で行はれたもので、それを契機とする急激にして劃期的な展開と再編の姿は、實にこのやうな準備の成熟の段階を度外視しては理解し難いものだった。即ち、高機移入四五年ならずして寛保年間には桐生近在に急速に普及する一方、いち早く奉公人の成立を見（寶曆四、に七百八）、この速

やかな發展は早くも延享以來西陣をしてその特權的地位防衛のため屢次の對策をとらしめるまでに至つたのだ（西陣が丹後織と移入を制限した明和度の桐生（ともに桐生紗綾の紗綾産額は十萬餘反に上つた）。だが、吾々はこゝで高機移入を劃期とする桐生絹織の展開をかうした積極的な面でのみ捉へることで満足すべきではない。封建制下における市場の狭さと特に絹市場の停滞性と特權性は、やがて各地絹織の勃興におされて桐生をして嘗ての西陣の地位に接近させるのであり、明治以降に至るまで貫徹する桐生機業の「二つの魂」は、すでに高機による再編の過程の裡にも瞭かにみることが出来る。即ち、桐生機業再編における高機の意義は、一方では專業機屋の養蠶農家よりの分離、前者の町方への集中と周邊農村の生絲供給者としてのそれへの從屬化をもたらし、かつ町方專業機屋の内部に手工場制への集積を促がし、技術的にもまた天明の撚絲八丁の發明による撚絲手工場の成立をはじめ整染各行程の分業化をもたらし、桐生をして關東機業の自生的展開の主導者たるの地位に高めるに至つたのだが、他方各地絹織の普及は安永の足利絹市再興氣運を直接の動因として、早くも安永十年「桐生領外高機取立禁」の請願、寛政九年「桐生機株設置請願」等に見られるやうに、桐生をして自らを西陣に似せて、いひかへればその停滞性と顛倒性において最も封建的な高級西陣「まがひ」品市場に

自己の展開の主流を限定し特殊化せしめるに至つたのだ。寛政二年の西陣紋工招聘による染機の移入はかうした内的要求と關聯して理解さるべきで、文化文政度の繁榮は、桐生にとつてはすでにこのやうな姿勢の上に開化したのだつた。即ちこの時期を通じて打出された桐生生産品種の變轉きはまりなき多様性の性格（金襴・蝦子・放天・露紋・御名・縮緬より縮緬多八端に至る。また箱尺帯地より蒲團・地・襦袢地に至る）と、これに對應する手工場の特殊高級品生産への傾斜（御用機屋の成立）並びに大家品における下機賃機の登場はまさに桐生における「二つの魂」の相剋そのものの姿に他ならなかつた（この特質は明治末期までを通じての桐生。この技術的進化的性格の裡にも貫いてゐる）。かうして、文化文政をへた天保度においては、桐生はかゝるものとして量的にも質的にも封建制下で到達しうる最高の分化と發展の限界に達してゐたといつてよい。

さていま一つこゝで指摘したいことは、前記安永に始り文久に至る桐生足利紛争（後者の獨立に至る）の意義についてだ。この問題は一般に後進足利の桐生への接近としてのみ理解されるにとどまるやうだが、卑見によればこれはかゝる發展度の量的差異の問題に解消しえぬ質的な要因を含むものと思ふ。即ち、一つには木綿織を基調とした足利と絹を主とする桐生との對抗關係、いひかへれば封建制下における近代國民市場生成過程の質的差別にかゝる問題であり、二つにはこれとからみ合ひつゝ生起した

一橋論叢 第七卷 第二號

面における早熟な近代化によつて手工場段階のもつ幼弱さを一部分補完し庇護してゐたといふべきだらう。桐生が、羽二重をはじめ新規輸出織物の新興諸地方による急速な侵略にあつて、漸次帶地御召等の生産領域に後退せねばならなかつたことは、だからむしろ當然なのだつた。かくて四十年代、電氣力織機を得て急速に進行する新たな再編は、嘗ての再編成主導者としてのそれではなく、すでに體制的に進行してゐた各地力織機化の重みにおされての近代化に他ならなかつた。

四

以上、本史の收録する範圍内で、おもに桐生の占めてきた日本織物業における地位とその機能にかゝはらしめつゝ、筆者の感想の一端をのべさせてもらつたが、あまりにもディテイルを缺いた性急な概括が却て本史のもつ重厚な輝きを傷ける結果になつたのではないかをおそれるのだ。いふまでもなく本史の内容は以上によりその一端をも盛りつくしえない厚みをもつてあり、經營形態・生産販賣機構は申すまでもなく、賃業者及び勞働力、技術、品種の變遷と生産費、諸「弊風」と仲間・組合の活動、「市」の變遷、諸統計、地圖、年表等をはじめ、經濟的、社會的、かつ生活の營みの内面をまで浮彫のやうにのぞか

しめる貴重な諸記録に充たされてゐるのであつて、就仲間・組合關係の文書及び主要人物の略傳の中にまことに得がたい資料が含まれてゐることを特記せねばならない。

〔附記〕 桐生機業に關する主要文獻を左に掲ぐ。

- 1 「兩毛地方機織業調査報告書」東京高等商業學校・三浦新七他（明三四）
 - 2 「群馬縣織物業沿革調査書」縣內務部（明三七）
 - 3 「群馬縣織物現況調査書」縣第三部（明三九）
 - 4 「關東の機業」西陣新興會・本庄榮治郎他（大三）
 - 5 「兩毛機業大觀」岡田重五郎（大六）
 - 6 「桐生織物業に於ける前貸制度」柳川昇（經濟學論集・昭六―七）
 - 7 「兩毛機業情況調査」『兩毛機業の發展傾向を視る』谷川靖夫（ダイヤモンド・昭一一）
 - 8 「桐生マニユファクチュアの型態並に段階」相川春喜（歴史科學・昭一二）
 - 9 「徳川時代桐生織物業の史的發展」大島五郎（土屋喬雄「日本資本主義史論集」所收昭一二）
- その他、商大には、「桐生織物業史論」（飯島權藏）、「兩毛地方の機業研究」（本間幸次郎）等の卒業論文がある。